

「コミュニケーション・キャンプ2007」実践報告

1年次 小林美智子 吉備豊 建元喜寿 本弓康之
金森雄大 工藤泰三 小澤真尚 岡聖美

要旨 本校では、高校入学後の導入期指導として「コミュニケーション・キャンプ」を継続的に実施している。本年度の取り組みでは、さらなるコミュニケーション能力の育成を目標にプロジェクトアドベンチャー的な体験プログラムを充実させ、また、このキャンプに対する評価を外部に依頼した。この結果、この本校の取り組み（本年度の取り組みも含めて）が生徒の高い満足度を毎年維持し続けていること、さらに、このキャンプに対する外部評価において本校の野外教育プログラムが学校生活導入期において有効であることが確認された。

キーワード： コミュニケーション・キャンプ 導入期指導 信頼関係 達成感

1. はじめに

本校では、入学直後から高校生生活に円滑に入っていくための導入期指導として「コミュニケーション・キャンプ」（以下「コミキャン」と称する）を実施している。このキャンプは、本校での学校生活を円満にすること、また、総合学科での学びを理解させ生徒のキャリア発達を促すことを目標に、入学式翌日から3泊4日の日程で体験を伴う宿泊実習である。

平成11年度から本校が実施しているこの「コミキャン」は、その実践による成果とその反省をふまえ、毎年「コミキャン」での体験プログラムを担当する信州自然大高校及び黒姫ライジングサンホテルスタッフと共に複数回にわたる打ち合わせなどを通して、この体験プログラムに改良を加えながら実施している。

8回目となる本年度の「コミキャン」では、本校へ入学してくる生徒の個性の変化、本校の考えるキャリア教育の充実、従来の「コミキャン」の取り組みによる成果等をふまえながら、さらに充実した「コミキャン」を目指し、キャンプの体験プログラムの改良と新たな体験プログラムを導入することとした。

2. 本年度の目標

本校の「コミキャン」は、総合学科における必修科目である「産業社会と人間」の導入プログラムとして、総合学科での生徒のキャリア形成に必要な力を育成する土台づくりを目的の1つに位置づけている。そこで、本年度はこれまでの「コミキャン」の実践及びその反省、入学してくる生徒の実態の変化などを考え、さらなる生徒のコミュニケーション能力の育成を目標とした。

特に、最近の本校に入学してくる生徒について、生徒

個人の考え方にとらわれ、生徒間の仲間意識が低下しているのではないかと、また、生徒は達成感を感じた経験が少ないのではないだろうかという印象を今回の「コミキャン」を担当する教員間で共有していた。そこで、本年度は下記の4項目を重点的に考えた「コミキャン」を目指した。

① 人と人との信頼関係を築く

仲間の力が自然と必要だと思わせるアクティビティや生活を体験させること、また、できる限り自由時間を減らし、生徒が自分や他人を考える時間を与えることで、仲間意識や信頼関係を培う。

② 良い大人に出会う

人は一人では生きていけないことを生徒1人1人に体験的に理解させ、生徒が大人に助けを自然と求めるような環境を作る。また、校長講話・社会人講話等により、実際に主体的に学習することの意義や行動することの大切さを学び、総合学科である本校の目標である「自ら考え、自ら学び、自ら行動する」ことの重要性を理解する。

③ 達成感をあじあわせる

生徒に徹底した達成感とともに、自己効力感をもたせることで、自己肯定感や未来志向型の力を養わせ、また同時に達成感による楽しさを生徒に十分にあじあわせ、すてきな思い出を共感できる仲間作りを目指す。

④ 精神的・肉体的な負荷を与える

負荷のあるプログラムを実施することで、安易な「満足感・達成感」の反応を求めるのではなく、継続的な「満足感・達成感」によるコミュニケーション能力の向上を期待する。

3. 本年度の取り組み

本年度の目標であるさらなるコミュニケーション能力の育成を目指し、現地で体験プログラムを担当する信州自然大学校及び黒姫ライジングサンホテルスタッフとの数回にわたる検討により、これまで半日で実施していたプロジェクトアドベンチャー的な体験プログラム「森のアドベンチャー」をさらに発展させた、1日を通して行う体験プログラムとして「チャレンジプロジェクト（CP）」を実施した。これは従来行っていた活動が半日であったため、その活動内容がアイスブレイク的な活動にとどまっていたため、時間を1日に延長することにより、活動するグループの人間関係を高い次元に引き上げることを目的としたためである。

また、これまで実施してきたマウンテンバイクツーリング（MTB）について、本年度では、従来のツーリングコースよりも走行距離を延長し、約30kmの起伏のあるコースとした。また、これまでMTBコースの選択方法は、生徒間で相談させ生徒に選択させる方法をとっていたが、本年度は、より生徒へ精神的・肉体的な負荷のかかるコース設定ができるように、MTBの生徒の活動に同行するインストラクター（大人）の状況判断で、ツーリングコースの選択をできるようにした。

	4月11日	4月12日	4月13日	4月14日
午前	出発 開校式	チャレンジプロジェクト（CP） マウンテンバイク（MTB） （80名を入れ替えて実施）		クラス対抗レク （長縄飛び） 昼食作り
	午後 アイスブレイク			閉校式 解散
夜	校長講話 R-CAP	社会人講話 ナイトハイク	クラス対抗 ゲーム	

表1 本年度のコミュニケーション・キャンプ日程

さらに、本年度の「コミキャン」では、総合学科である本校のキャリア教育の根幹をなす「産業社会と人間・産業理解」の授業の中で重点的に取り組むことにした生徒のキャリア形成を促す取り組みの1つとして生徒の進路意識を高めることを目的に、適職・適学診断プログラム（R-CAP：リクルート社）を実施した。

4. 「コミキャン」の効果と考察

平成15年度から継続的に「コミキャン」実施直後（キ

ャンプ実施後から1週間以内に実施）に行っているアンケート結果（3段階で評価用紙を作成）によると、このキャンプに参加する前のキャンプに対する意識（図1）は毎年それほど高くないことがわかる。

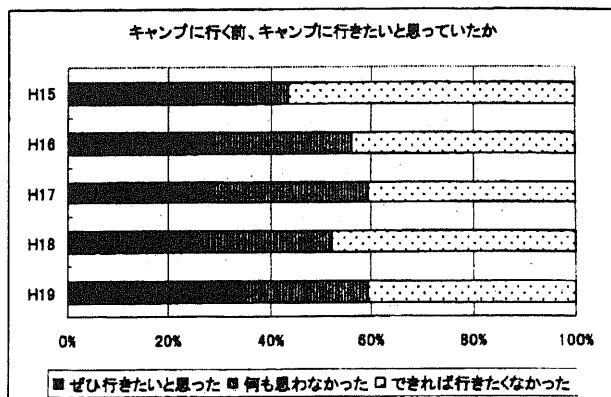


図1 アンケート結果①

しかし、「コミキャン」終了後の生徒のこのキャンプ全体に対する満足度（図2、図3）をみると、満足度が非常に高く、毎年8割以上を占めていることがわかる。

これは、本校での高校生活を円滑に入っていくために採用した「コミキャン」が、本校での高校入学直後の導入期において有効であることを示している。

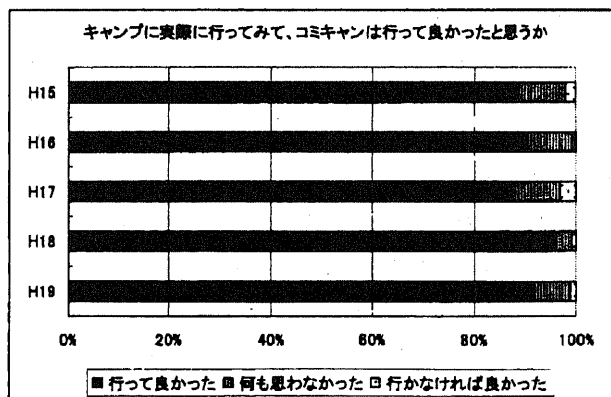


図2 アンケート結果②

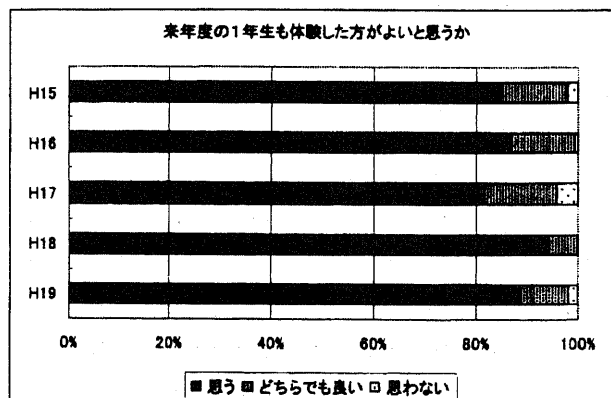


図3 アンケート結果③

キャンプ直後に実施している各体験プログラムに対する満足度アンケート（図4、図5、図6）では、どの体験プログラムでも毎年半数以上の生徒が満足していることがわかる。「コミキャン」での最初のプログラムである「アイスブレイク」の満足度を見ると毎年満足度が伸びていることがわかる。このプログラムは、まだお互いの名前も知らない生徒間のふれあいを通してうち解けあっていく体験プログラムで、担当するインストラクターの技量が生徒間の仲間意識に大きく影響を与える。図4の結果は、このプログラムを担当している信州自然大学学校のインストラクターの技術の向上と関係があると考えられる。

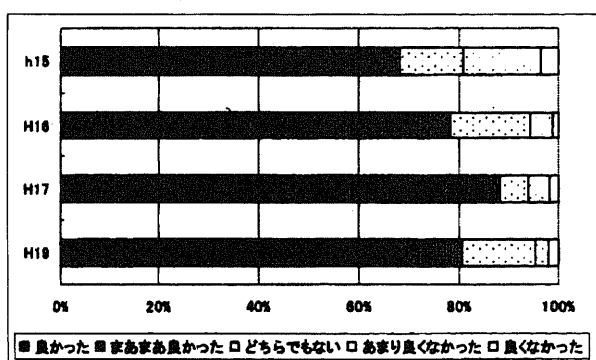


図4 アイスブレイクの満足度

また、図5・図6によると、本年度のマウンテンバイクツーリングの満足度とチャレンジプロジェクトの満足度が、他の年度に比べて低下している。これは、本年度の体験プログラムでは、これまでの「コミキャン」に比べて生徒により肉体的・精神的な負荷を与えることを目的にプログラムを計画したためと考えられ、この2つの活動が生徒に肉体的・精神的な負荷をあたえた証拠ではないかと考えられる。

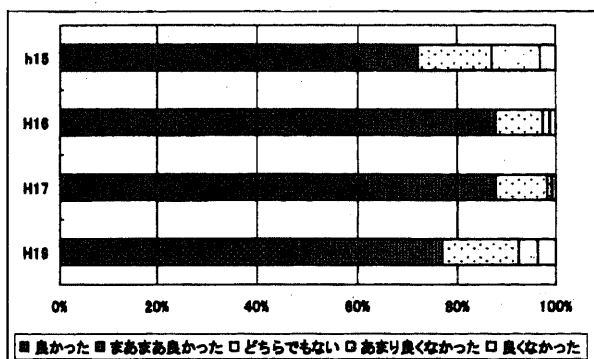


図5 マウンテンバイクツーリングの満足度

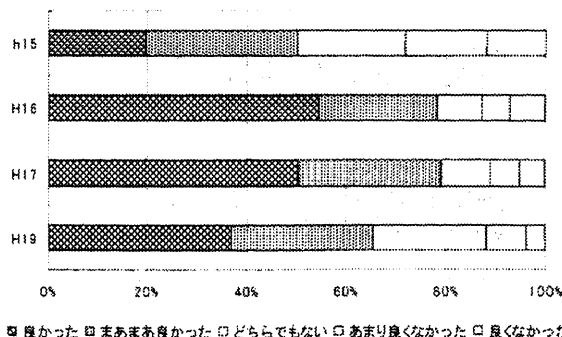


図6 プロジェクトアドベンチャー的体験プログラムの満足度（本年度はCPとして実施）

また、本年度の取り組みでは、プロジェクトアドベンチャー的な活動であるCPに重点をおき、この活動によりより高度な人と人との信頼関係が築けるように配慮した。

さらに、これまでアイスブレイク・CP・MTBを活動ごとに別の団体に依頼し実施してきたが、本年度より全ての体験型プログラムを信州自然大学学校に依頼したことで、基本的に1つのグループに対して1人のインストラクターが継続して担当できるようになった。このことにより、「コミキャン」において、より高度なプロジェクトアドベンチャー的プログラムが実施できるような体制となった。

しかし、ツーリング用マウンテンバイクの台数による事情により、生徒160名を80名ずつの2つの大きなグループに分け実施した。

	2日目	3日目
グループA	CP	MTB
グループB	MTB	CP

表2 グループ編成

キャンプ終了後に実施したアンケート調査（5段階で評価）の結果（図4）においてグループAとグループBを比較すると、CPを2日目に実施したグループAの方が、CPに対する満足度が比較的高く、CPが生徒に強烈なインパクトを与えたのではないかと推測される。

また、この結果から、人と人との信頼関係を主目的とする「コミキャン」を計画する場合には、アイスブレイク → CP → MTBといった体験プログラムの流れを考へることが生徒の満足度を高める上で重要であることを示している。

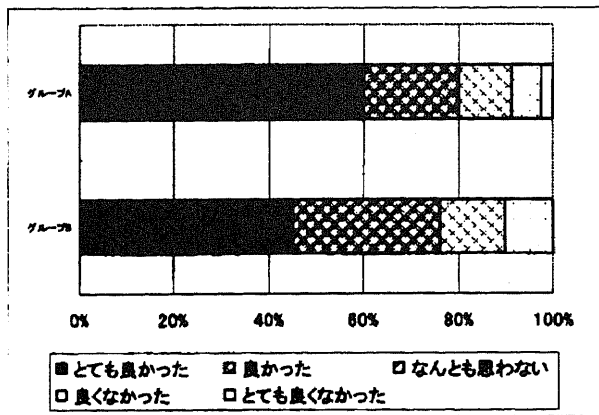


図7 CPの満足度（キャンプ直後実施）

5. 外部評価の実施

本年度の「コミキャン」では、はじめて外部機関によるキャンプの評価活動を行った。本校ではこれまで、キャンプ実施後に、生徒に対する図1から図6のようなアンケート調査を実施し、キャンプ全体や各活動の評価を行ってきた。このなかで9割程度の生徒がキャンプに対して好意的な回答（図2、図3）をし、多くの生徒から「キャンプに行ってよかった」という声を聞いてきた。このため教員間でもこの「コミキャン」の効果は大きなものであると認識されてきた。しかし、キャンプの何が良かったのか、キャンプによりどのような教育効果があったかについては、客観的にはこれまで明らかにしていなかった。これは、時間的制約や、教員側が科学的・客観的な方法論を持ち合わせていないといったことから、主観的な評価や簡単な振り返りに終わっている場合が多かったためである。

本年度は、筑波大学の野外活動に関する研究員から協力を得ることができ、はじめて科学的な評価の試行を行った。その結果、

- 1) ガイダンスの一環として行う野外教育プログラムを含む宿泊学習が、生徒の「自分からかかわる力」と「思いを言葉で伝える力」を中心としたコミュニケーション力評価を高めた。
- 2) 不安傾向の多寡にかかわらず、生徒はキャンプ場面においてコミュニケーション力評価を高めた。
- 3) コミュニケーション力評価は、概してキャンプ中に向上していたが、キャンプ1ヶ月後もその効果は継続していた。

学校生活導入期での野外教育プログラムの有効性はこれまでも指摘されてきたが、実施数はごく少数であった。本校のカリキュラムのように導入期指導のプログラム

として野外教育プログラムが明確に位置づけられ、多くの高等学校でガイダンスとしての野外教育プログラムが実施されれば、現在の高等学校が抱えている問題（中途退学者や生徒の消極的進路変更など）を解決できる可能性がある。そのためには、現在すでに実施されている野外教育プログラムの評価を行っていく必要がある。

今回の評価活動では、教員、研究者さらにはプログラムをおもに実施する信州自然大学校のファシリテーターも加わり3者の協働という形で行った。評価結果は、平成19年6月17日（日）に東京の代々木オリンピックセンターで行われた第10回日本野外教育学会で教員、ファシリテーター、研究者の立場からそれぞれ発表し、関係者から多くの評価をいただいた。また国立青少年教育振興機構研究紀要に、評価結果全体をまとめ投稿した。こうした教員と研究者あるいはキャンプの実施者が協働して評価に携わり、それを発表していくという今回の試みによって、客観性が高く、学校現場にも価値のある資料を提示しうるものと考えられた。

6. おわりに

本校の「コミキャン」では、本校の学校生活を円滑にすることを目的にしながら、信州自然大学校及び黒姫ライジングサンホテルスタッフと共に毎年プログラムを改善しながら実施している。本年度の取り組みでは、さらなるコミュニケーション能力の育成を目標にプロジェクトアドベンチャー的な体験プログラムを充実させ、また、このキャンプに対する評価を外部に依頼した。

この結果、この本校の取り組み（本年度の取り組みも含めて）が生徒の高い満足度を毎年維持し続けていること、さらに、このキャンプに対する外部評価において本校の野外教育プログラムが学校生活導入期において有効であることが確認された。

現在、本校の抱える課題として、2年次での新たな人間関係づくりができない生徒が目立ち始めていることである。これは、総合学科の特徴である2年次以降での生徒個人の選択による授業や2年次で新たに行うクラス替えによって、新たな人間関係をつくることよりも1年次で培われた人間関係を重視し、2年次でのホームルーム内の人間関係が希薄になる傾向があげられる。また、本校生徒の家庭環境も大きく変化し、家族に対する悩みを抱えている生徒が約1割にも達することもあげられる。

これらのことをふまえ、2年次以降にもコミュニケーション能力の向上を目的とする新たな体験型プログラムを開発し実施することで、新たな生徒間のよりよい人間関係を築くことができるのではないかと期待している。

引用文献・参考文献

1. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第39集(2001)
「コミュニケーション・キャンプ～プログラムの立ち上げとその効果～」
2. 黒姫高原体験教育プロジェクトチーム編
「コミュニケーション・キャンプ」
3. 服部次郎 筑波大学学校教育論集 第28巻 (2006)
「総合学科における導入期指導としての校外学習」
4. 信州自然大学校
<http://www.town.shinanomachi.nagano.jp/iyasinomori/index.html>
5. プロジェクトアドベンチャー・ジャパン
「グループの力を生かす 成長を支えるグループづくり」 みくに出版
6. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第42集(2004)
「第5回 コミュニケーション・キャンプ実践報告」
7. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第43集(2005)
「第6回 コミュニケーション・キャンプ実践報告」
8. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第44集(2006)
「第7回 コミュニケーション・キャンプ実践報告」
9. 堀出知里、「キャンプで身につく「コミュニケーション力」の評価方法を考える」、日本野外教育学会 第10回大会プログラム・研究発表抄録集、2007、
PP. 44-45
10. 小林美智子、「総合学科における入学直後のキャンプによる指導実践」 日本野外教育学会 第10回大会プログラム・研究発表抄録集、2007、
PP. 64-65
11. 建元喜寿、「入学直後の高校1年生に対する野外教育プログラムの評価」 国立青少年教育振興機構 研究紀要、第8号、2008年